

【漁況】

[マアジ]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のマアジの漁獲量は、昭和40年の53万トンにピークに減少傾向となり、昭和55年には5万4千トンとなりました。

その後増加傾向に転じ、平成8年には33万トンに増加し、平成10年までは30万トン台で推移しましたが、再び減少傾向に転じ、平成26年は14万6千トンとなりました。

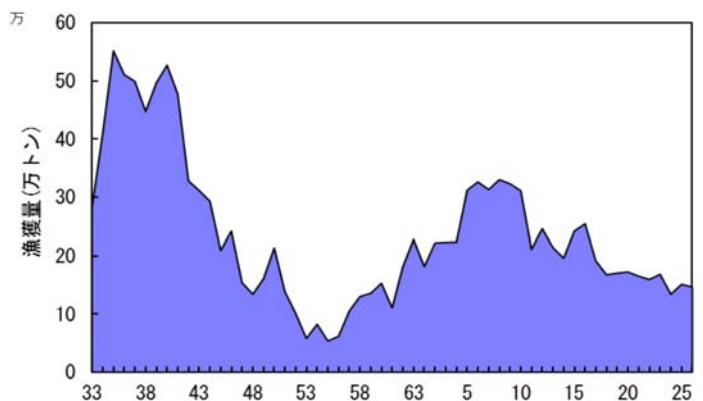


図 全国のマアジ漁獲量の推移 年

2. 県内の平成27年10～12月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域では、11月に串木野沖、縄瀬沖で漁場が形成されました。

薩南海域では、10月に野間池沖で漁場が形成されました。

4港計のまき網では、マアジ小（1歳魚：平成26年生まれ）、マアジ仔（0歳魚：平成27年生まれ）主体に451トンの水揚げで、前年の349%及び平年の118%と、前年を上回り、平年並に推移しました。

3. 県内の平成28年1～3月期の見とおし

漁獲の主体は、マアジ仔・豆（1歳魚：平成27年生まれ）で、マアジ小・中（1・2歳魚：平成27・26年生まれ）も混じるでしょう。

来遊量は、前年並で平年を上回るでしょう。

（根拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

漁獲の主体になると考えられるマアジ1歳魚の来遊水準は、平成26年と平成27年の漁獲状況に大きな変化が無いことから、平年を上回った平成26年～平成27年と同程度と考えられます。2歳魚以上は、近年低調に推移していることから前年並と考えられます。

総合的に判断すると、前年並で平年を上回ると考えられます。

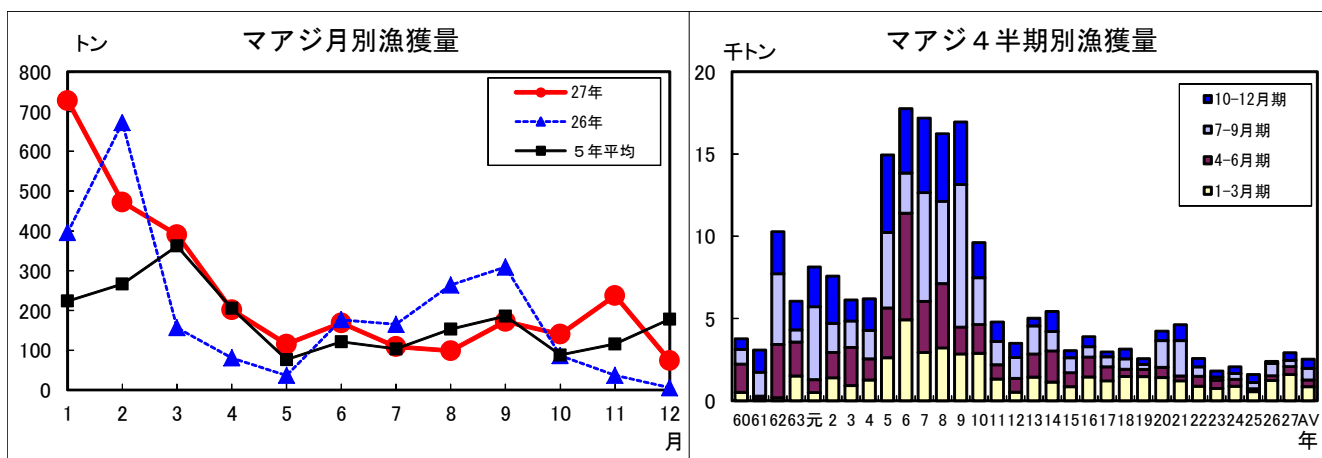


図 マアジまき網漁獲量変化（4港計）

※平年値は過去5年（平成22～26年）の平均値（AV）、平成27年12月23日までの水揚げ量を使用

[サバ類]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のサバ類の漁獲量は、昭和53年の160万トン进行ピークに年々減少し、平成3年には26万トンとなりました。

平成5年から増加に転じ平成9年には85万トンとなりましたが、平成14年には28万トンまで減少しました。

平成18年には65万トンまで増加しましたが、その後減少傾向となり、平成26年は50万2千トンとなりました。

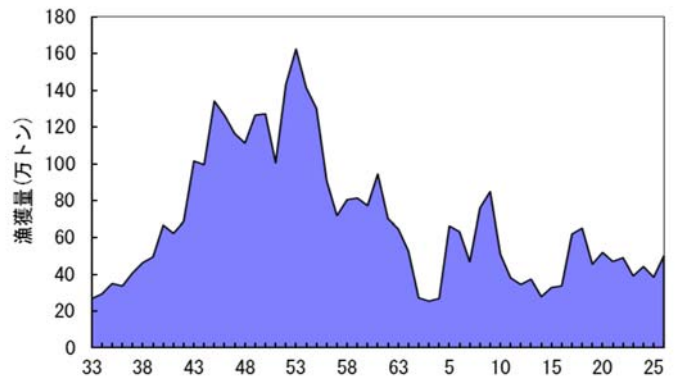


図 全国のサバ類漁獲量の推移 年

2. 県内の平成27年10～12月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域では、11月に縄瀬沖、串木野沖、牛深沖、12月に牛深沖で漁場が形成されました。薩南海域では、10月に湯瀬、草垣周辺、11～12月に宇治周辺で漁場が形成されました。

4港計のまき網では、ゴマサバ豆(0歳魚：平成27年生まれ)、マサバ豆(0歳魚：平成27年生まれ)主体に3,021トンの水揚げで、前年の331%及び平年の96%と前年を上回り、平年並みに推移しました。

3. 県内の平成28年1～3月期の見とおし

漁獲の主体は、ゴマサバ中小、中(2・3歳魚：平成26・25年生まれ)で小(1歳魚：平成27年生まれ)も混じるでしょう。

来遊量は、前年・平年並でしょう。

(根拠)

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

近年、ゴマサバの漁獲主体は2歳魚以上となっていることから、引き続き2歳魚以上の漁獲が主体になると見込まれます。また、平成27年8～10月に0歳魚(平成27年生まれ)のまとまった漁が見られたことから、1歳魚も混じると考えられます。

総合的に判断すると、前年・平年並と考えられます。

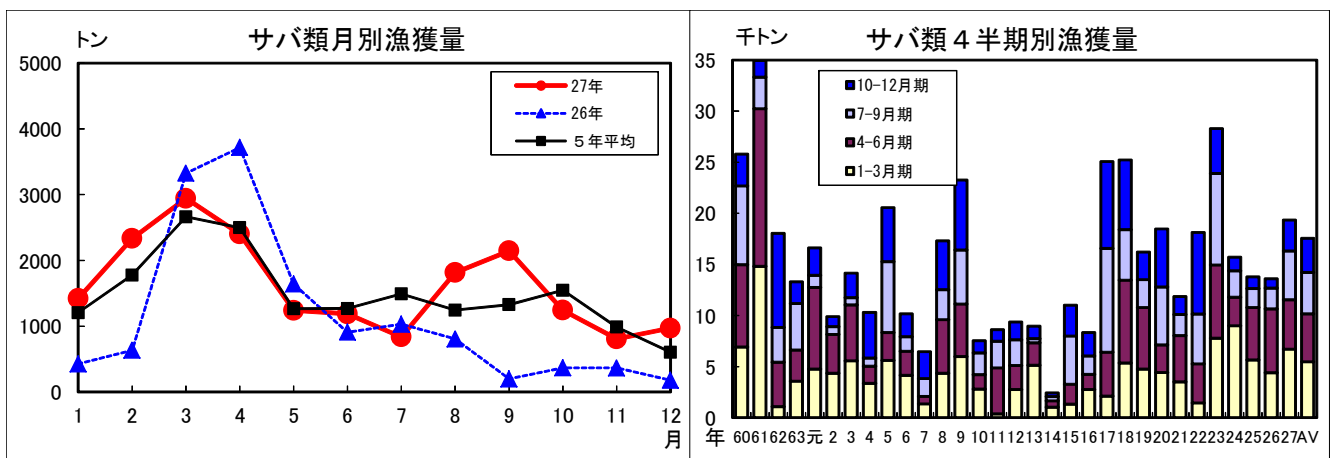


図 サバ類まき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年(平成22～26年)の平均値(AV)、平成27年12月23日までの水揚量を使用

[マイワシ]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のマイワシの漁獲量は、昭和30年代から40年代にかけての不漁期の後、昭和48年頃から増加の傾向が見られ、昭和63年には449万トンまで増加しました。

平成元年以降、全国的に漁獲量は減少を続け、平成14から22年までは、10万トンを下回る低い水準で推移していましたが、平成23年以降は10万トン以上に増加し、平成25年は22万トンで14年ぶりに20万トンを超える漁獲がありました。

平成26年も20万トンと前年を下回ったものの、増加傾向が続いています。

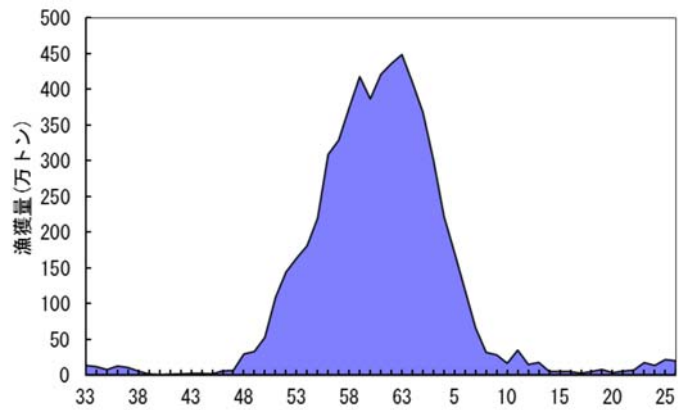


図 全国のマイワシ漁獲量の推移 年

2. 県内の平成27年10～12月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域のまき網では、甌島周辺、牛深沖で漁場が形成されました。

薩南海域のまき網では、10～11月に坊津沖、野間池沖、枕崎沖で漁場が形成されました。

北薩海域の棒受網では、川内沖から長島沖で漁場が形成されました。

4港計のまき網では、小羽(0歳魚：平成27年生まれ)主体に中羽(1歳以上)が混じり、6,056トンの水揚げで前年の2,190%、平年の2,125%でした。

北薩海域の棒受網は、150トンの水揚げで前年の270%、平年の272%でした。

3. 県内の平成28年1～3月期の見とおし

漁獲の主体は、小羽～中羽(1歳魚：平成27年生まれ)でしょう。

来遊量は前年・平年を上回るでしょう。

(根拠)

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

今期漁獲の主体となる1歳魚(平成27年生まれ)は、10月以降好漁が続いているため、来遊量は前年・平年を上回ると考えられます。

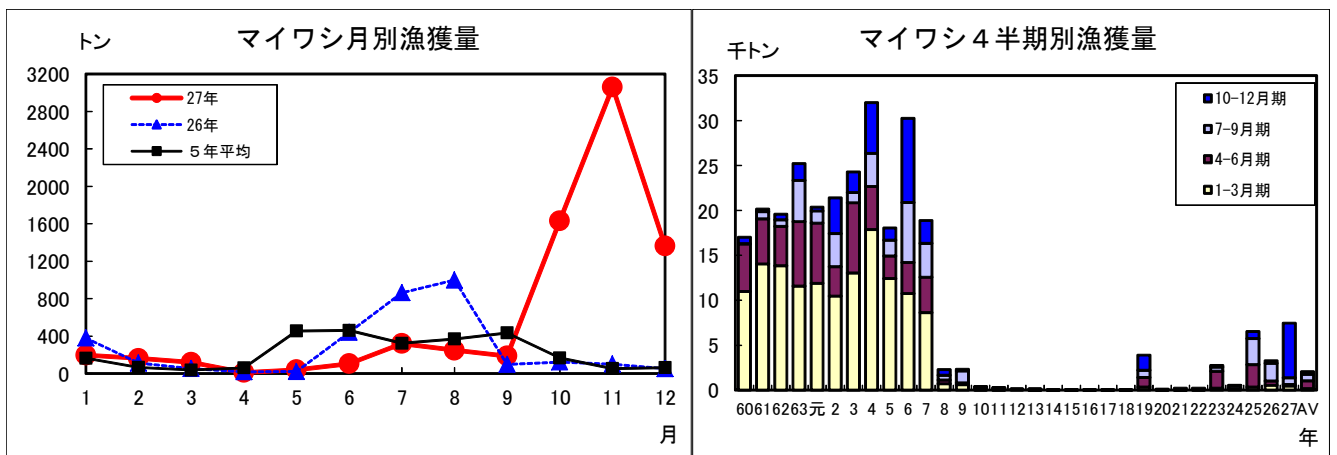


図 マイワシまき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年(平成22～26年)の平均値(AV)、平成27年12月23日までの水揚げ量を使用

[ウルメイワシ]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のウルメイワシの漁獲量は、昭和30年代以降、増減を繰り返しながらも増加傾向を示し、平成6年に6万8千トンとピークを迎えた後、減少傾向に転じ平成12年には2万4千トンまで減少しました。

平成15年以降は再度増加傾向に転じ、平成25年は8万9千トンで昭和33年以降では最高の漁獲量となりました。

平成26年は7万5千トンと前年を下回ったものの、高い水準を維持しています。

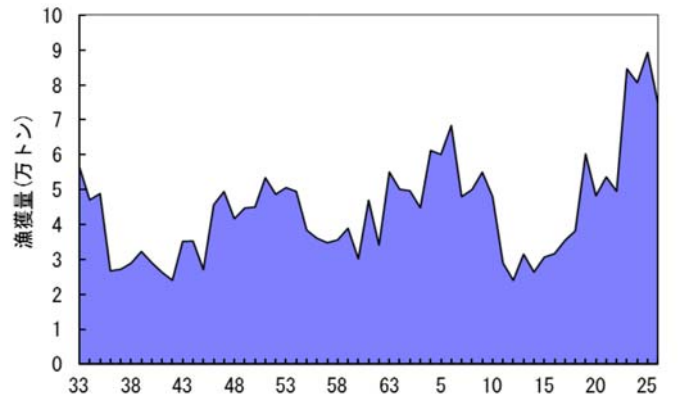


図 全国のウルメイワシ漁獲量の推移

年

2. 県内の平成27年10～12月期の漁況の経過

北薩海域のまき網では、牛深沖、甌島周辺で漁場が形成されました。

薩南海域のまき網では、10～11月に湯瀬、坊津沖で漁場が形成されました。

北薩海域の棒受網では、川内沖から長島沖で漁場が形成されました。

4港計のまき網では、小羽～中羽（0歳魚：平成27年生まれ）主体に5,955トンの水揚げがあり、前年の457％、平年の278％でした。

北薩海域の棒受網では、847トンの水揚げで前年の152％、平年の195％でした。

3. 県内の平成28年1～3月期の見とおし

漁獲の主体は、小羽（1歳魚：平成27年生まれ）でしょう。

来遊量は前年を上回り、平年並でしょう。

（根拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

今期漁獲の主体となる1歳魚（平成27年生まれ）は、10月以降好漁が続いているため、来遊量は前年を上回り、平年並になると考えられます。

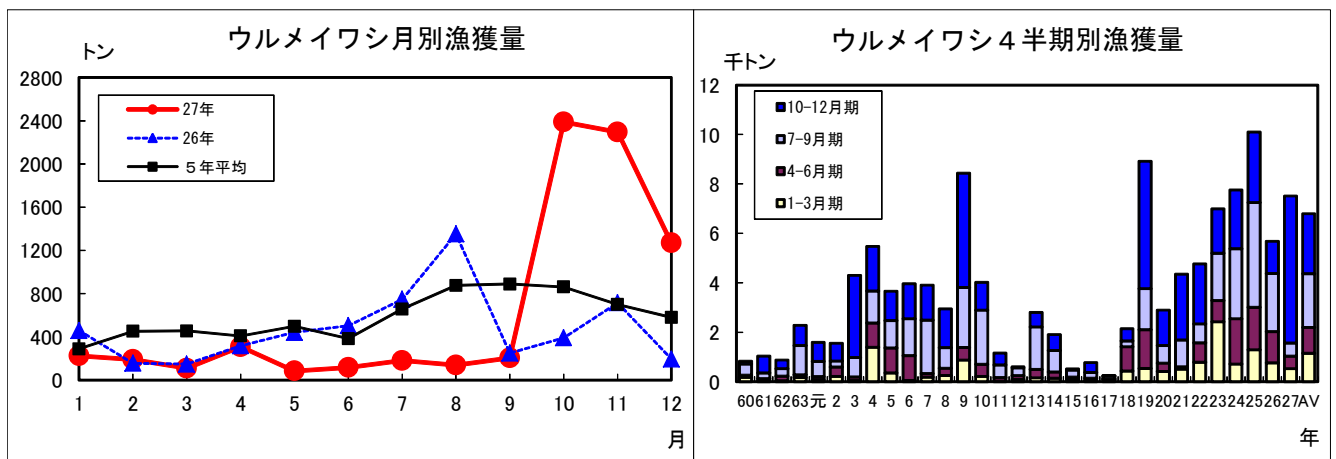


図 ウルメイワシまき網漁獲量変化（4港計）

※平年値は過去5年（平成22～26年）の平均値（AV）、平成27年12月23日までの水揚げ量を使用

[カタクチイワシ]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のカタクチイワシの漁獲量は、昭和48年まで30万トン台で変動していましたが、昭和49年以降減少傾向となり昭和54年には13万トンとなりました。

その後は大きく増減を繰り返しながら増加傾向にあり、平成15年は過去最高の53万5千トンとなりましたが、その後減少傾向に転じ、平成26年は24万9千トンとなりました。

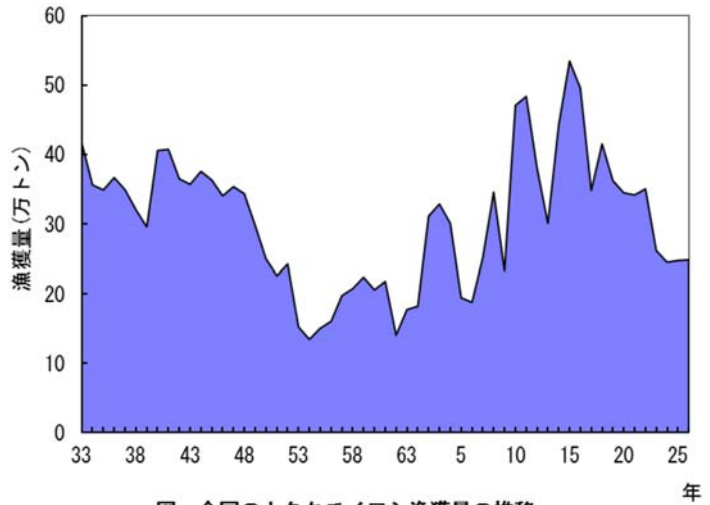


図 全国のカタクチイワシ漁獲量の推移

2. 県内の平成27年10～12月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域のまき網では、牛深沖、甕島周辺に漁場が形成されました。

薩南海域のまき網では、坊津沖に漁場が形成されました。

4港計のまき網では、大羽（平成26年生まれ）主体に1,032トンの水揚げで、前年の16%、平年の82%でした。

北薩海域の棒受網では、長島（内海）、川内沖に漁場が形成され、71トンの水揚げで、前年の116%、平年の149%でした。

3. 県内の平成28年1～3月期の見とおし

漁獲の主体は、中羽（平成27年生まれ）でしょう。

来遊量は前年を下回り、平年並でしょう。

（根拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

前期の漁況は平年並で推移しており、来遊量は近年では好調であった前年を下回り、平年並となると考えられます。

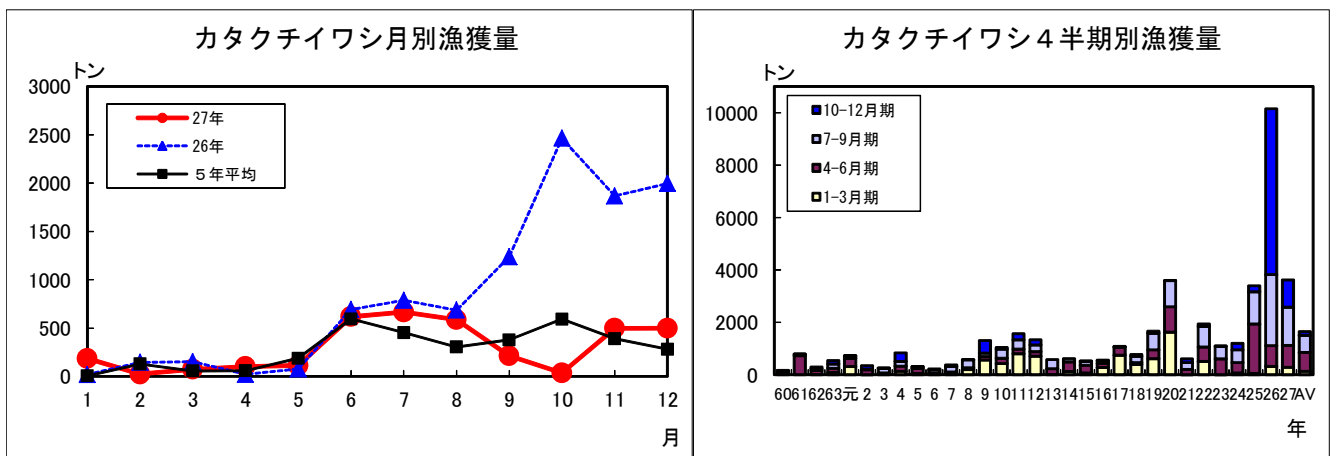


図 カタクチイワシまき網漁獲量変化（4港計）

※平年値は過去5年（平成22～26年）の平均値（AV）、平成27年12月23日までの水揚量を使用

[シラス]

1. 県内の平成 27 年 10 ～ 11 月期の漁況の経過

バッチ網漁業の漁獲量は、西薩海域では平成 11 年の 5,450 トンをピークに減少傾向を示し、平成 14, 15 年と 1,000 トンを下回り低調に推移しました。その後平成 16 年は 3,507 トンと比較的好調に推移しましたが、平成 17 年以降減少傾向を示し、平成 26 年は平成 11 年以降では最低の 794 トンとなりました。

志布志湾海域では平成 14 年は 396 トンで特異的な不漁、平成 19 年は 2,374 トンで特異的な好漁の年もありますが、平成 11 年以降 700 ～ 1400 トンの間で推移してます。平成 26 年は 1,247 トンとなりました。

今期の西薩海域の漁況は、カタクチシラス主体に 493 トンの水揚げで、前年の 217 %、平年の 200 %でした。

志布志湾海域の漁況は、カタクチシラス主体に 568 トンの水揚げで、前年の 280 %、平年の 235 %でした。

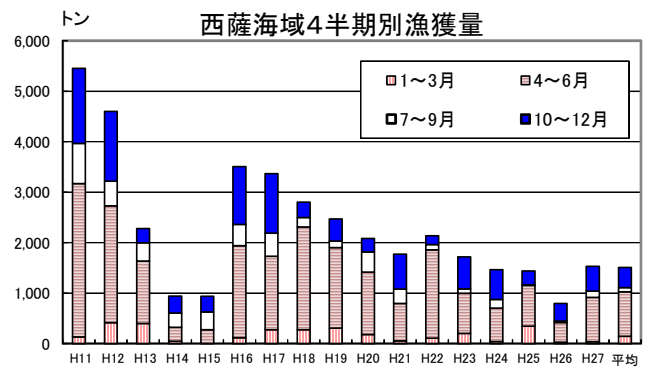
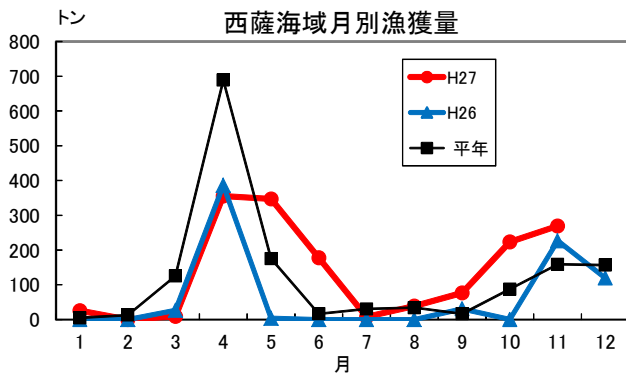


図 西薩海域バッチ網漁業の漁獲量変化(4 漁協計)

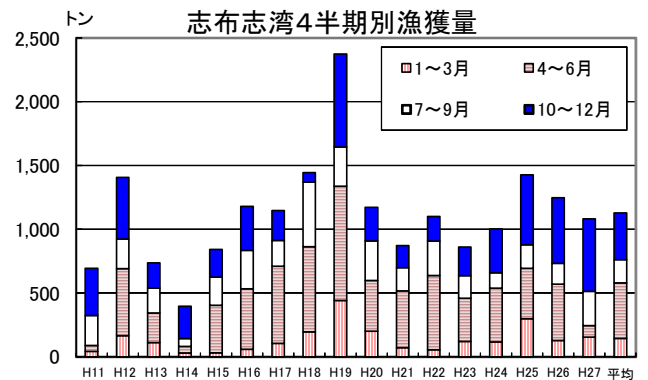
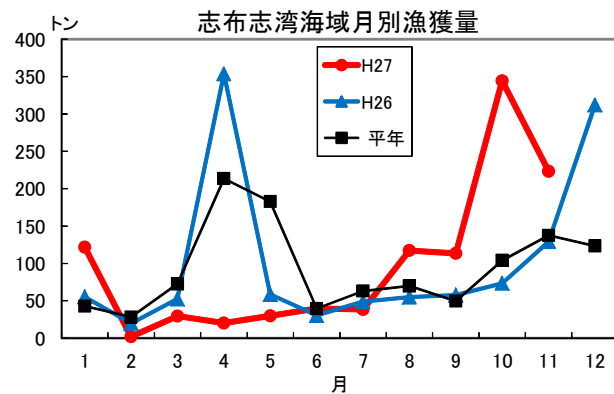


図 志布志湾海域バッチ網漁業の漁獲量変化(2 漁協計)

※平年値は過去 5 年（平成 22 ～ 26 年）の平均値(AV)，平成 27 年 11 月 30 日までの水揚量を使用

[イワシ類参考資料]

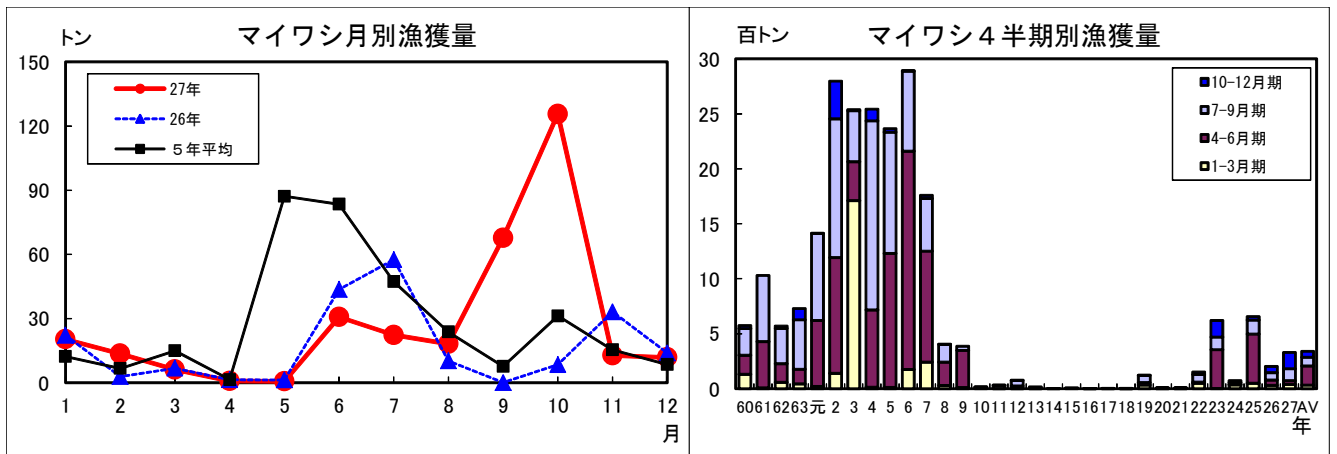


図 マイワシ棒受網漁獲量変化(阿久根港)

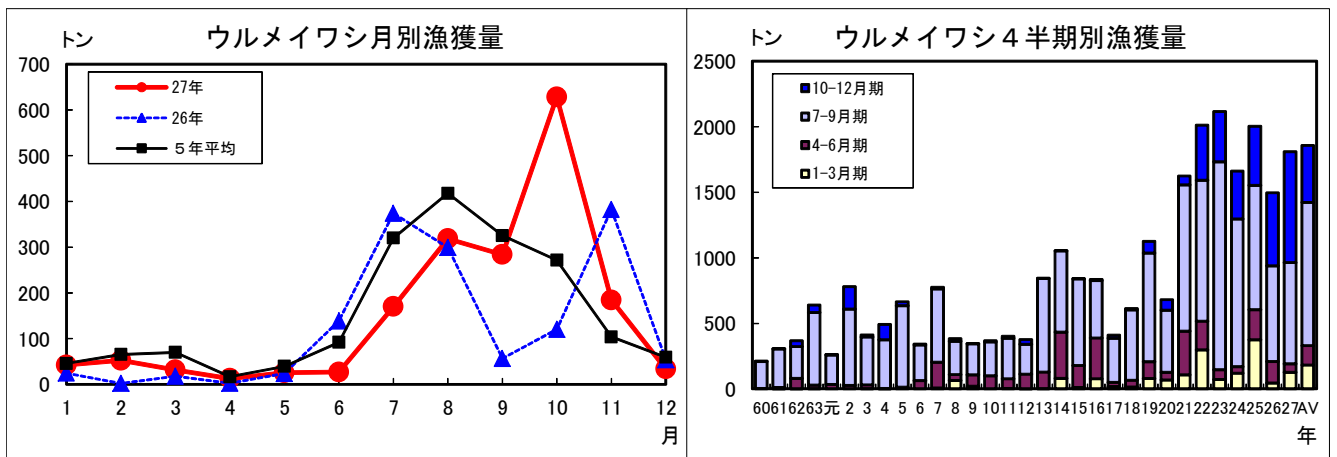


図 ウルメイワシ棒受網漁獲量変化(阿久根港)

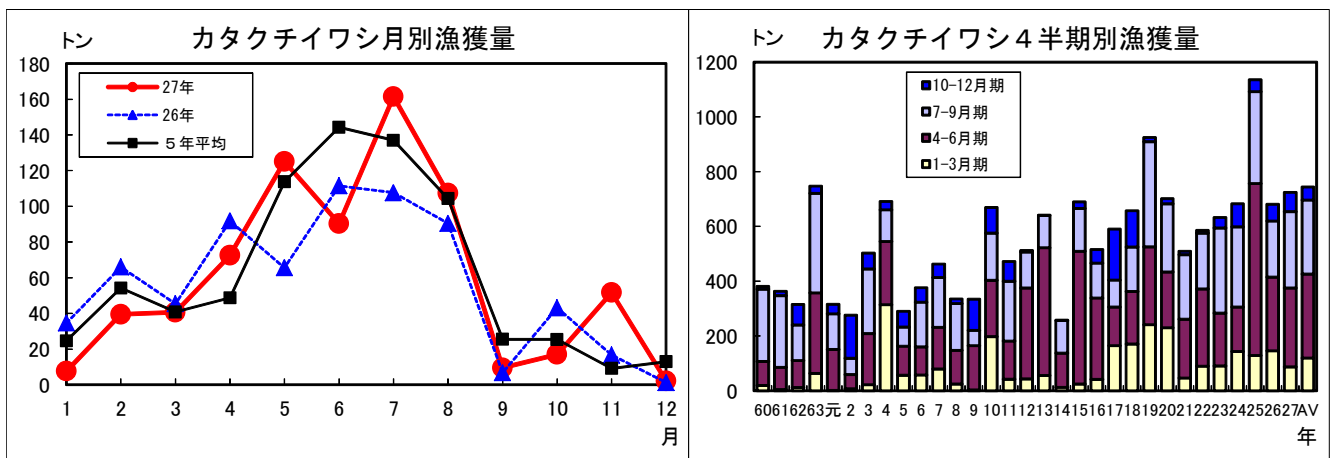


図 カタクチイワシ棒受網漁獲量変化(阿久根港)

※平年値は過去5年(平成22~26年)の平均値(AV),平成27年12月23日までの水揚量を使用

[参考：漁況経過のみ記載]

〈ムロアジ類（クサヤモロ、モロ）（水産技術開発センター調べ：4港計）〉

1. 県内の平成27年10～12月期の漁況の経過

ムロアジ類の漁獲量は、平成2年の21,700トンをピークに急減し、平成6年以降は、1,500トンから4,500トンの間での推移しており、平成26年は2,000トンとなりました。

平成27年10～12月は、薩南海域では、10月に草垣周辺、島間沖でクサヤモロ豆、11月に宇治でクサヤモロ豆、12月に種子島南でクサヤモロ小・豆、屋久島南東でクサヤモロ小の漁場が形成されました。期全体で795トンの水揚げで、前年の78%及び平年の55%と前年・平年を下回りました。

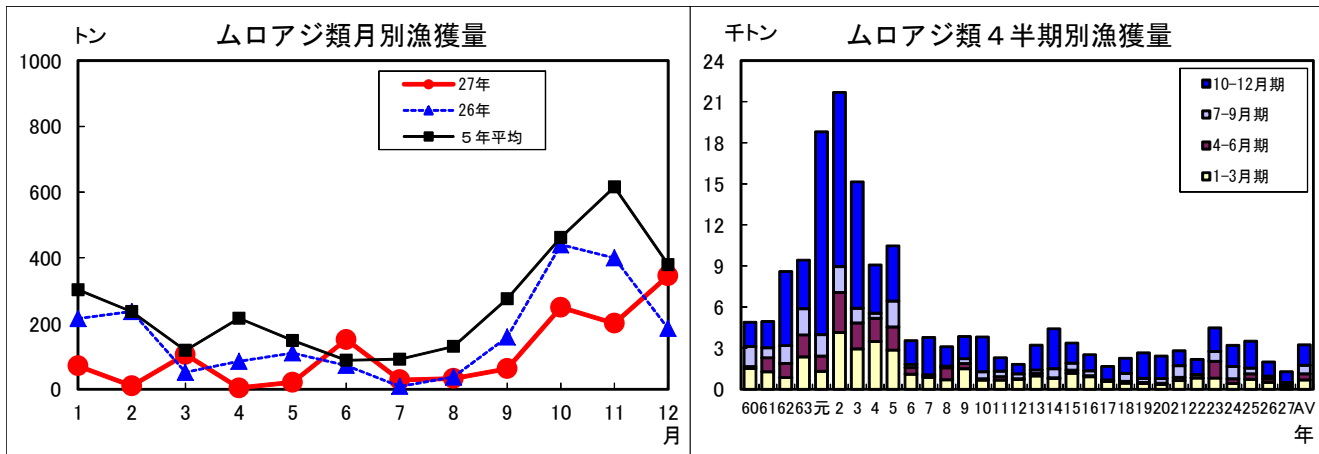


図 ムロアジ類まき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年（平成22～26年）の平均値(AV)、平成27年12月23日までの水揚量を使用

〈オアカムロ（水産技術開発センター調べ：4港計）〉

1. 県内の平成27年10～12月期の漁況の経過

オアカムロの漁獲量は、平成元年の5,300トンをピークに一旦減少し、平成7年に4,400トンと再度ピークを迎えた後は減少傾向となっていました。平成20年は2,291トンと一旦増加しましたが、再び減少傾向で平成26年は654トンとなりました。

平成27年10～12月は、薩南海域では、竹島周辺、草垣周辺で中主体、湯瀬で豆主体の散発的な漁獲がありました。期全体で69トンの水揚げで前年の35%及び平年の15%と前年・平年を下回りました。

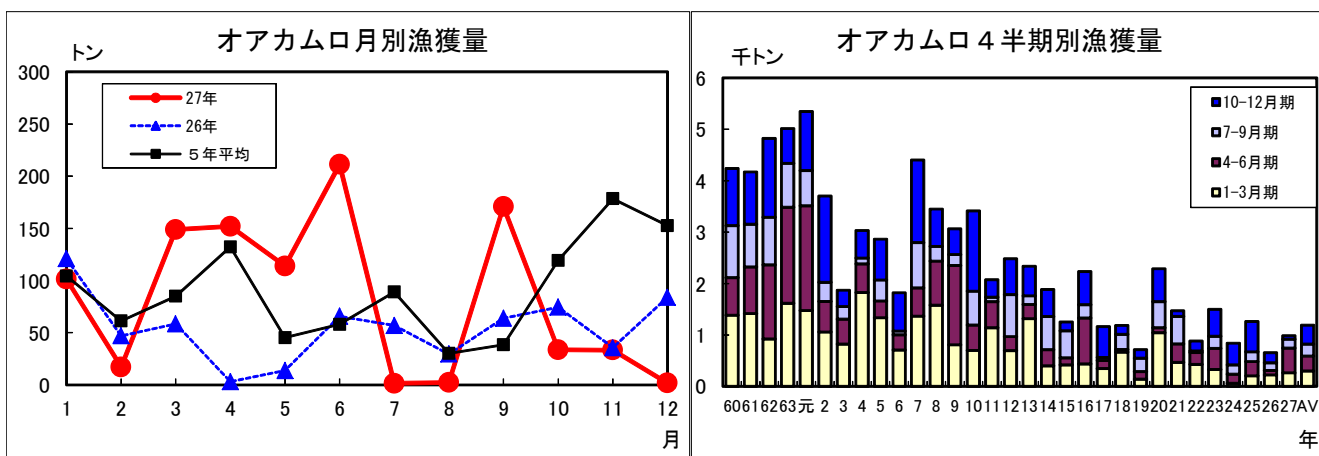


図 オアカムロまき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年（平成22～26年）の平均値(AV)、平成27年12月23日までの水揚量を使用

〈マルアジ（アオアジ）（水産技術開発センター調べ：4港計）〉

1. 県内の平成 27 年 10 ～ 12 月期の漁況の経過

マルアジの漁獲量は、昭和 62 年から平成元年に 1,500 トンを超えるピークがあり、その後低調に推移し、平成 12 年から 15 年に再度ピークを迎え 15 年には 3,150 トンと最高を記録しましたが、平成 16 年以降は低調に推移し、21 年は過去最低の 94 トンとなりました。

22, 23 年はやや増加したものの依然低調でしたが、26 年は 694 トンと増加しました。

平成 27 年 10 ～ 12 月は、散発的な漁獲に留まり、期全体で 56 トンの水揚げで、前年の 51 % 及び平年の 46 % と前年・平年を下回りました。

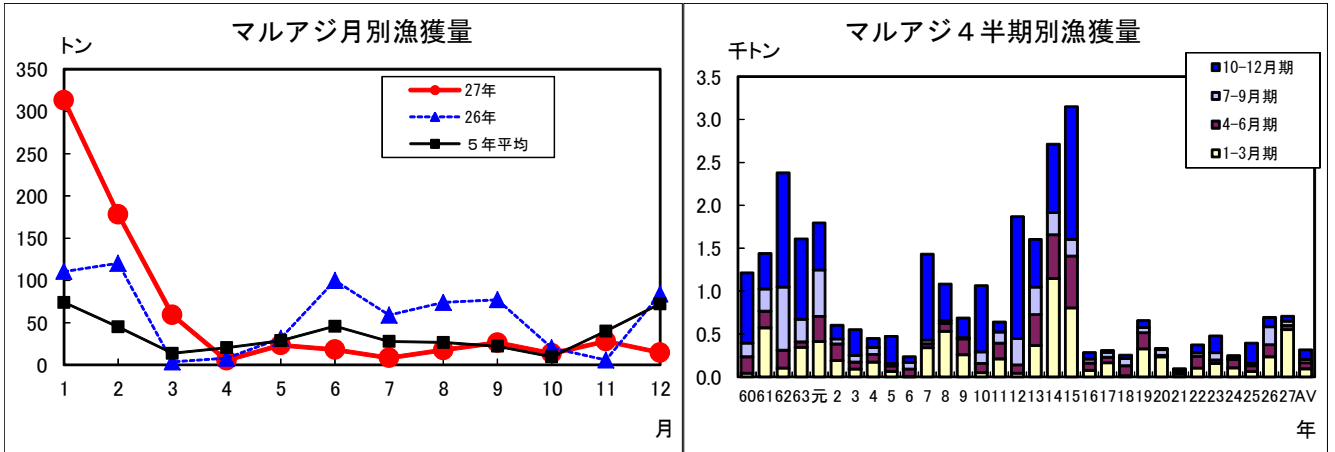


図 マルアジ（アオアジ）まき網漁獲量変化（4港計）

※平年値は過去 5 年（平成 22 ～ 26 年）の平均値(AV)，平成 27 年 12 月 23 日までの水揚げ量を使用